

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 柳沢 秀郎

論文題目 **Ernest Hemingway and East Asia:
Japanese and Chinese Influences on His Writings**
(アーネスト・ヘミングウェイと東アジア—日本と中国が作家と
作品に与えた影響)

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	長畑 明利
委 員	名古屋大学教授	松下千雅子
委 員	名古屋大学准教授	Mark C. Weeks
委 員	ノートルダム清心 女子大学教授	David S. Ramsey

1. 本論文の構成と概要

本論文 “Ernest Hemingway and East Asia: Japanese and Chinese Influences on His Writings” (「アーネスト・ヘミングウェイと東アジア—日本と中国が作家と作品に与えた影響」) は、ヘミングウェイの人生とその作品に見られる東アジア、特に、日本と中国の影響を、彼の著作と記録文書をもとに検証するものである。

ヘミングウェイの異文化接触及びその創作への影響については、近年研究が進んでいるものの、中国・日本をはじめとする東アジアとの接触については、これまで十分に研究されてこなかった。たしかにヘミングウェイはヨーロッパ、アフリカ、中米 (キューバ) との関わりが深く、これらの国々を舞台にした数多くの作品を書いている。一方、東アジアを舞台にした作品は見あたらない。しかし、ヘミングウェイには日本や中国とも様々な接点があった。ジャーナリストとして日本や中国に関連する記事を書く一方、小説やその他の文章でも日本や中国に言及している。日本を訪れることはなかったが、日中戦争時には中国を訪問している。東アジアからの移民や留学生と遭遇する機会もあった。本論文は、こうした事実を手がかりに、20 世紀前半から冷戦期に至る政治的・文化的文脈を背景に、ヘミングウェイがいかなる形で日本や中国と関わりを持ち、また、それらが彼の創作にいかなる影響を及ぼしたかを明らかにしようとするものである。

本論文は全 5 章からなり、これに Introduction (序論) と Conclusion (終章) 及び Bibliography (文献リスト) が加わる。「序論」では、問題設定、各章の構成に加え、ヘミングウェイの実生活における日本及び中国との接点が概略される。学位申請者 (以下、申請者) はそこで、幼少時のヘミングウェイが日露戦争のニュースに強い関心を示したこと、後年、キューバで中国人コックを雇用していたことなどを紹介するとともに、キューバのヘミングウェイ博物館での調査に基づき、彼が所蔵していた日本や中国に関する書籍への書き込みの紹介を行っている。

続く各章で、申請者は、ヘミングウェイの小説 4 作に見られる日本・中国との関わりと、彼の中国訪問について論じている。まず、第 1 章 “Frederic Henry’s Dilemma with the Allies: Alliances and the US-Japan Imperialistic Conflict in *A Farewell to Arms*” は、ヘミングウェイの初期の長編『武器よさらば』(1929) を取り上げ、主人公フレデリック・ヘンリーの日本批判について検討する。申請者は、作品の背景をなす第 1 次世界大戦に関わる同盟や密約を紹介した上で、作品中に見られるヘンリーの日本批判が、当時日本とアメリカとの間で繰り広げられていた太平洋の派遣を巡る確執を踏まえるものであることを指摘する。連合国側で戦っていたヘンリーは、日本もまた連合国側であったにもかかわらず、アメリカ人としてのナショナリズムに基づいて、日本を批判しているのである。申請者はそこに、ヘンリーが直面した連合に基づく連帯と彼自身のナショナリズムとのジレンマを見、このようなジレンマを描くことで、ヘミングウェイは第 1 次世界大戦の戦争不条理を浮かび上がらせようとしたのだと主張する。

第 2 章 “Harry Morgan’s Identity Crisis: Orientalism and Slumming during the Great Depression in *To Have and Have Not*” は、1930 年代の小説『持つと持たぬと』(1937) を取り上げ、作品中の中国人表象を、主人公である貧乏白人ハリ・モーガンの危機意識と関連づけて論じる。この小説には、中国から太平洋を横断し、キューバを経て、アメリカへの密航を試みる中国人と、彼らを餌食にする中国人密航ブローカーが登場するが、申請者は、アメリカに密航した中国人たちが上陸後に目指したと想定される都市部のチャイナタウンに注目する。申請者によれば、チャイナタウンは当時、「スラミング型」観光スポットとして脚光を浴びていたが、アメリカの白人富裕層が

チャイナタウンに向けていたスラミング的欲望のまなざしは、本作品において、モーガンらキーウエストの貧乏白人たちにも向けられている。ヘミングウェイは、アメリカ社会において人種の優位にあるはずの白人たちが、チャイナタウンの中国人同様観光資源化され、また、それによって、彼らが内面化していた人種ヒエラルキー上の優位が脅かされる様を描いているのだ、と申請者は論じる。

第3章 “Hemingway as a Spy and an ‘International Friend’: The Influence of His China Experience on His Writings” は、1941年のヘミングウェイの中国訪問が、日中戦争下における国民党によるプロパガンダと米国の諜報活動と密接に関わるものであったことを明らかにし、また、この訪中をめぐる経験がヘミングウェイの作家としての姿勢にもたらした影響について考察する。ヘミングウェイは訪中に際し、アメリカ側から諜報活動への貢献を期待されていたとされるが、申請者は、『中央宣傳部國際宣傳處工作概要（二十七年迄三十年四月）』と題された中国国民党の機密文書の分析を通して、ヘミングウェイを含む訪中外国人の多くがそこで「国際友人」と呼ばれ、国民党に有利なプロパガンダの協力者となることが期待されていたことを示す。ヘミングウェイは結局、戦争プロパガンダの協力者を求めている国民党関係者の記憶から消えていくが、訪中後ほどなくして編まれた戦争物アンソロジー *Men at War* の序文で、彼はプロパガンダに対する作家のあるべき態度を明文化する。申請者はその文章に着目し、訪中の経験は、ヘミングウェイに「反プロパガンダ」の姿勢を再確認させる機会となったのだ主張する。

第4章 “Hemingway’s Requiem for Battle Fields: Atomic Jokes after Hiroshima/Nagasaki in *Across the River and Into the Trees*” は、冷戦時に書かれた小説『河を渡って木立の中へ』（1950）の核に関するジョークに注目し、広島・長崎への原爆投下と、それがもたらした「核の時代」が、戦場を好んで描いてきた「戦場作家」としてのヘミングウェイにとって、いかなる意味を持ったかについて論じる。申請者は、伝記や書簡に見られるヘミングウェイの核への言及が常にジョークの形を取り、本作品においても、主人公リチャード・キャントウエルの核兵器への言及がジョークの中に見出されることを指摘する。申請者はさらに、キャントウエルの核に関するジョークには、ヒロシマ・ナガサキ以後、戦争から「戦闘の儀式性」が失われたことに対する老軍人キャントウエルの喪失感と、戦場に赴く価値を見出せなくなった「戦場作家」ヘミングウェイの喪失感を見て取ることができると論じる。つまり、申請者によれば、核の時代は、ヘミングウェイが描き、考察してきた人間の死を戦場もろとも奪うことになったのであり、それが戦後のヘミングウェイが「戦場小説」ではなく、「冷戦小説」を書かざるを得なくなった理由の一つなのである。

第5章 “Re-emergence of the Encounter with Long-haired Painters: The Hidden Influence of the Japanese Artists in *The Garden of Eden Manuscripts*” は、未公開原稿を加えた『移動祝祭日—修復版』（2009）と『エデンの園』（1986）の草稿を取り上げ、1920年代のパリにおけるヘミングウェイと日本人芸術家との出会い、その出会いがもたらしたヘミングウェイの芸術家意識への影響、及び、『エデンの園』執筆に見られるその経験の関わりについて論じる。ジャーナリストとして生活していたヘミングウェイは、1920年に、芸術を志してパリを訪れていた日本人画家たちと出会う。『移動祝祭日—修復版』には、ジャーナリスト業界では許されなかった長髪を帯びた彼らの容姿を、芸術家のシンボルとして憧憬するヘミングウェイの様子が描かれており、また、その後ジャーナリスト業と決別する際に、彼が自身を長髪にしたこと、そしてそれは妻が求めた倒錯行為に応えるものでもあったことが記されている。一方、『移動祝祭日』と同時期に執筆が進めら

れた『エデンの園』では、編集段階で削除された箇所において、若きヘミングウェイ夫妻をモデルにしたかのように、画家ニック・シェルドンが妻の「相似願望」に応えようとして髪を伸ばす。また、断筆中の作家デイヴィッドは、髪を伸ばしたニックとの（2月のパリでの）出会いを契機に、創作活動を再開する。申請者は、『移動祝祭日』と『エデンの園』の草稿に、「2月のパリでの長髪の画家との出会いが作家アイデンティティの確立（回復）をもたらす」というモチーフが共通して見られることを指摘し、『エデンの園』のプロット形成には日本人が大きく関与していたのだと論じる。

「結論」は、本論文各章の論点を整理するとともに、次の点を確認する。すなわち、ヘミングウェイの異文化接触に関する比較文化研究において、東アジアはこれまで等閑視されてきたが、実際は、日本及び中国との少なからぬ接点があり、それらが彼の創作に影響を及ぼしていること。また、ヘミングウェイの東アジアとの接触をもたらした要因として、戦争と世界規模での人の移動があったことである。

2. 本論文の評価

本論文の価値は、まず第一に、これまで十分に論じられてこなかった、ヘミングウェイと日本・中国との接点に着目し、作品分析とともに、それを論じていることにある。ヘミングウェイ研究における未開拓の領域を切り開く論文であると言え、高く評価できる。第二に、本論文は未公開のものを含む資料・草稿研究の成果を用いて書かれている。これらの資料や草稿の研究からは、国民党機密文書におけるヘミングウェイへの言及、『エデンの園』草稿における長髪のモチーフと日本人画家との関連など、新たな発見や考察がもたらされており、この点も評価できる。第三に、本論文は、ヘミングウェイの小説の読解において、しばしば見落とされがちなモチーフやプロットを歴史的・政治的背景と関連づけることで、意外性のある解釈を提示している。『持つと持たぬと』における中国人密航者のモチーフとチャイナタウン及びキーウエストのスラミング型観光との関連性の指摘、パリにおける長髪の日本人画家との出会いが『エデンの園』の草稿に姿を変えて現れていることの指摘など、本論文における小説の読解には、日本・中国との接点を起点とする、興味深い議論が展開されており、評価できる。

一方、本論文には次のような弱点も見出される。日本・中国以外の東アジアの国との関わりが論じられていないこと、各章の論考の独立性が高く、章相互のつながりと、論文全体を通しての議論の流れがわかりにくいこと、ヘミングウェイの主張や認識を批判的に見る視点に乏しいこと、モダニズムのコスモポリタンの性格との関連が十分に論じられていないことなどである。

これらは重要な指摘ではあるが、本論文全体の評価を損なうものではなく、むしろ、申請者の今後の研究活動に役立つべき点として指摘されるものである。本論文は、これまで十分に注目されてこなかった、ヘミングウェイの日本と中国との接点及びその作品への影響を、彼の著作と記録文書の分析をもとに明らかにし、また、ヘミングウェイの小説の新たな読解を提示した画期的な論文である。その成果は、アメリカ文学研究、比較文化研究に新たな知見を加えるものであり、審査委員は全員一致して、本論文が課程博士を授与されるに値するものであると判断した。